あさひの日常活動紹介

石塚　知子

Aさん（横地分類A1）は、職員の動きを見たり、部屋の扉が開くと、入ってくる人を見たりします。また、他の利用者に職員がホワイトボードを使って絵を描いている動きや、コマを回して止まったり落ちたりするような動きを少し離れたところからでもよく見ていることがあります。タブレットで『ふくらむ風船』のアプリを行いました。何も写っていない画面にちらっと視線を向け、すぐに視線をそらしました。職員が画面をタップして「ぷう」という音と共に風船が現れると、画面の方に視線を向けました。再びタップして風船が現れるとじっと見つめました。長押しして音が伸び、風船が大きくなると目を大きくして見ていました。画面に複数の風船が動いている中の一つが「ひゅんひゅんひゅん」と音を立てて回ると視線を移し、目を凝らすように見ていました。画面をスワイプして小さな風船が連続で線を描くようにたくさん出てくると口元が緩みました。職員が鳥のマークをタップすると、それまでふわふわと不規則に揺れるような風船の動きが止まったことに気付いてじっと画面を見ていました。たくさんあった風船が破裂音と共になくなっていく動きをじっと見つめ、画面に動きがなくなると職員の方に視線を移しました。画面の中に風船が現れ、不規則に揺れる動きと、動きの変化と共に音の変化があることで面白さを感じていました。

Bさん（横地分類A2―B）は、短いフレーズが一定のテンポで繰り返される語りをよく聞きます。Bさんに『いろんなおとのあめ』という詩を語りかけました。「あめあめいろんなおとのあめ」と静かにゆっくりとした語りが始まると、職員の方に顔を向け、じっと聞いています。

「はっぱにあたって　ぴとん」「まどにあたって　ばちん」と、同じようなリズムの言葉の後に半濁音の擬音語が続き、それが繰り返されます。「かさにあたって　ぱらん」で眉をグッとあげたり「ほっぺたにあたって　ぷちん」で顔を上げたりして、擬音語の違いを感じているようです。また、ひとフレーズの中で上がったり下がったりする抑揚の繰り返しを聞き、後半に来る擬音語を待っているように感じられました。「こねこのしっぽに　しゅるん」と途中に今までとは違う響きの擬音語に変わり、顔をぐっと上げました。また「すみれのはなに　しとん」と続くと、柔らかな言葉の響きに変わり、大きく息を吐きました。最後の「あめあめあめあめ　いろんなおとのあめ」とそれまでの繰り返しのリズムとの違いに気付き口元が緩みました。同じような繰り返しの語りを聞き、擬音語の響きや、一定のリズムで続く語りから違うリズムのフレーズに変わることで面白さを感じているようでした。

こだまの日常活動紹介

川上　恵

Aさん（34歳、女性、横地分類A1）は、棒を持つとその棒で太鼓をねらってたたき、音を出すことができます。棒の先に磁石付きの紐をつけ、そこに色のついたマグネットをくっつける（釣りゲームのようなもの）活動をしました。磁石付きの棒を見せるとそこに手を伸ばし、指を少し動かして握ろうとします。本人が棒を握ってから色のついたマグネットを一つ見せて下に置き、セットしました。始めのうちは、セットしたマグネットを目で捉えることは少なく、手を動かしても、そのマグネットをめがけることなく棒を振り回すように腕を左右に動かしていました。そこで本人の持っている棒の先の磁石に色のついたマグネットをくっつけてみせると、今度はそれをよく見ていました。そうしてから、もう一度そのマグネットを下に置きました。すると、今度は色のついたマグネットをしっかりと見て、その方へと棒を持った手を動かしはじめました。紐の先についた磁石が色のついたマグネットの近くに来ると、そのあたりで手を左右に動かしました。そうしているうちに本人が握っている棒についた磁石に色のついたマグネットがくっつくと、手を動かすのをやめて、それを持ち上げました。職員に「できましたね」と声をかけられるとにこやかな表情になりました。それを繰り返しているうちにAさんの手の動かし方が変わってきました。持っている棒についた磁石が色のついたマグネットに近づくと、それを